第三者意見

「緑字企業報告書2014」に対する意見

千葉大学大学院　人文社会科学研究科　教授
倉阪 秀史

宝酒造の「緑字会計」は、日本の企業の中でも先駆的な取り組みとして高く評価されてきました。1998年という早い段階で発表された「緑字決算報告書」においては、"TaKaRaは緑字企業をめざします"と謳われ、"自然からの恩恵で事業活動を展開しているのなら自然に対してもその収支を報告しなければならないのではないか。私どもはこの自然環境に対する当社の事業活動の環境視点からの収支を「緑字（りょくじ）」と名付けました。そしてその結果を「緑字決算報告書」として年1回、社会に対して報告することといたしました"と述べられています。その後、環境報告書からCSR報告書へと展開する中でも、当初の宣言通り、緑字会計に関する報告を今日に至るまで継続されていることは、高く評価されるべきです。

しかし、報告の内容としては、改善の余地があるのではないかと感じました。今回の第三者意見の執筆にあたって過去の報告書も拝見しましたが、「緑字企業報告書2008」まで、環境目標の達成状況についての過去5年間程度のグラフが示されていました。また、「緑字企業報告書2011」まで、ライフサイクルにわたる環境負荷量が掲載されていました。しかし、現在の報告書には、ライフサイクルの各項目に関する環境負荷の総量や、環境目標の達成状況に関する過去からの推移についての情報が掲載されていません。当初の報告書と現在の報告書を比較した場合、環境報告という観点からは後退しているのではないでしょうか。

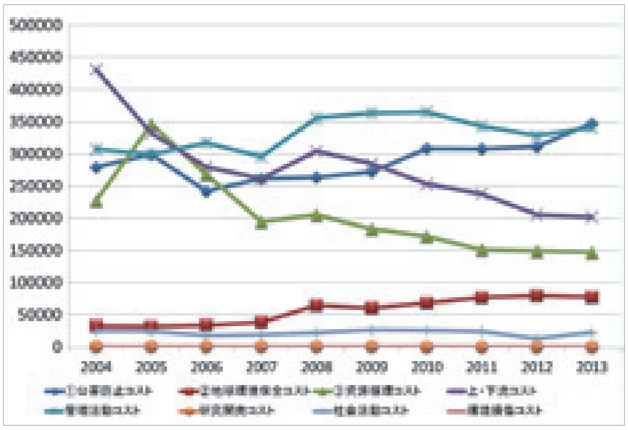
新しいECO指標が選定された2011年から現在までの指標の推移を過去の報告書から把握すると、事務所電気使用量、コピー用紙使用枚数、低公害車の導入率など毎年着実に改善している項目があります。過去からの年次推移を示すことによって、このような努力を具体的にアピールすることができます。「社員のいきいきのために」の項目のように、環境の項目でも、過去からの年次推移がわかるように工夫すると良いと思います。

指標の中でも、二酸化炭素排出量や用水使用量の原単位は、残念ながら改善していません。二酸化炭素に関しては、電力会社のCO_2排出原単位が悪化していることが影響しています。用水使用量に関しては、アルコール度25度（焼酎）換算で原単位を出しているため、アルコール度数の少ない商品の売り上げが増えている影響で改善していないという説明です。企業努力を具体的に把握できるように、エネルギー消費量ベースの原単位データや売上げあたりの用水使用量データなどもあわせて示す必要があるのではないでしょうか。

また、リユースに関する中心的な取り組みとして、はかり売りの拡大に取り組まれています。この点は他の企業にみられない貴重な取り組みです。新規開拓店舗数に関する目標を掲げて、毎年達成されていますが、この点でも「総量」が気になるところです。本報告書では現在全国で約160店舗に協力いただいている旨の記述がありますが、過去の報告書を見ると、2005年の段階で協力店数は210となっていました。酒屋さん自体の減少傾向が背景にあるのではないかと推測できますが、新規開拓店舗数のみではなく、協力店舗総数についての傾向も知りたいと思いました。

環境会計のデータについて、10年以上にわたって継続的に公表されていることは、大変すばらしいことです。環境保全コストには「投資」と「費用」がありますが、比較的継続性があると考えられる「費用」について過去10年間分をグラフにしてみました。途中で集計区分が変わっている

ところがあると思いますが、全体傾向としては、公害防止コストと地球環境保全コストが増加傾向にあり、容器包装リサイクル費用を含む上・下流コストや資源循環コストが減少傾向にあります。これは興味深い傾向です。コストがかかっていることが好ましくないということではありません。省エネやリサイクルへの支出は、エネルギー費用や廃棄物処理費用の削減というメリットを生み出します。できれば、メリット面も含めて、これらの傾向を評価してみることが必要ではないでしょうか。



歴史が長い報告書は、毎年の記述がどうしても同じような内容になりがちです。とくに、毎年の数字などが記載されていない部分については、記述が固定してしまう傾向があります。理想としては毎年新しい活動内容を展開することが望ましいわけですが、そうでない場合にも、記事構成の見直し、イラストの入れ替えなどの工夫を行うことが必要です。

さらに、報告書の記述がわかりやすいものになっているかも常に確認することが必要です。たとえば、本報告書の特集記事に、「白壁蔵」「黒壁蔵」という言葉がでてきますが、最初はこれが工場であるとはわかりませんでした。会社概要のページを見て、白壁蔵が神戸、黒壁蔵が高鍋にある工場であることがわかりました。このような社内特有の用語には十分に気をつける必要があります。

以上、細かな点も含めて指摘させていただきましたが、宝酒造が他の企業に比べて先進的な取り組みを進められてきた事実はゆらぎません。今後も、環境マネジメントの先進企業として、継続的に活動を進められ、他の企業の範となる報告書を公表されることを願っております。

編集方針

「緑字企業報告書2014」は、宝酒造のCSR（企業の社会的責任）に関する取り組みを、ステークホルダー（利害関係者）の皆様にわかりやすく誠実に報告することをめざして発行しています。

●対象組織：宝酒造株式会社単体の活動やデータを中心に報告しています。ただし、一部TaKaRaグループ企業の活動やデータを含みます。グループ企業を含むデータ部分については企業名を記載しています。

●対象期間：2013年4月1日～2014年3月31日
注）上記の期間以外は年度を記載します。

●発行時期：2014年7月

編集後記

本報告書では、一企業市民として、社会のさまざまなステークホルダーの皆様とのかかわりをご報告しています。

本年度の特集では、"日本の食文化を彩る～日本伝統の酒「和酒」～"と題して、「和食」がユネスコ無形文化遺産に登録されたことにちなんで、「和食」とともに日本の食文化を彩る宝酒造の「和酒」のおいしさや安全・安心への取り組み、そして日本の食文化を世界に広めていくための取り組みについてご紹介しています。

今後もよりよい活動を進めていくために、皆様方からの当社の企業活動、環境活動に対するご意見をお待ちしています。よろしくお願い申し上げます。

編集体制

・編集委員会（広報部門、環境部門、総務部門、人事部門、事業管理部門、営業部門、商品開発・宣伝部門、購買・製造部門、海外事業部門、品質保証部門、お客様相談部門、宝ホールディングス株式会社IR部門 計15名）
・編集責任者：中尾雅幸（環境課長）

発行責任者：松本博久（環境広報部長）